

各 位

武雄・杵島地区農業指導連絡協議会
杵島農業振興センター

「稲作情報（第3号）」について（送付）

このことについて、下記のとおり「稲作情報（第3号）」を送付しますので、業務の参考にしてください。

1. 気象概況

月	半旬	平均気温			最高気温			最低気温			降水量			日照時間		
		平年 (°C)	R7 (°C)	平年差 (°C)	平年 (°C)	R7 (°C)	平年差 (°C)	平年 (°C)	R7 (°C)	平年差 (°C)	平年 (mm)	R7 (mm)	平年比 (%)	平年 (hr)	R7 (hr)	平年比 (%)
5月	1	17.6	16.8	-0.8	23.8	23.3	-0.5	12.0	11.0	-1.0	27.2	29.5	108.5	30.9	42.3	136.9
	2	18.3	17.5	-0.8	24.5	22.2	-2.3	12.8	13.6	0.8	29.3	118.5	404.4	30.5	26.7	87.5
	3	18.8	18.4	-0.4	25.0	24.1	-0.9	13.3	12.6	-0.7	29.9	0.0	0.0	30.5	39.2	128.5
	4	19.5	21.8	2.3	25.7	25.6	-0.1	14.0	18.0	4.0	25.1	20.0	79.7	30.7	8.0	26.1
	5	20.2	19.9	-0.3	26.5	24.0	-2.5	14.7	16.9	2.2	19.6	132.5	676.0	30.6	14.6	47.7
	6	20.9	19.7	-1.2	27.1	26.4	-0.7	15.6	14.2	-1.4	22.6	132.5	586.3	34.5	43.8	127.0

5月6半旬の平均気温は平年より1.2°C低く、最高気温は0.7°C低く、最低気温は1.4°C低くなった。日照時間は平年比127%。降雨量は平年比586と多くなった。

2. 水稻情報田の生育状況（調査日：6月5日）

項目 品種	年次	草丈 cm	茎数 本/m ²	主稈 葉数L	葉色 SPAD	概要
コシヒカリ	本年値	61.0	633	10.9	39.8	・草丈は平年比102で平年並。茎数は平年比100で平年並。 ・主稈葉数は、平年より0.6葉少ない。 ・葉色は平年よりやや濃い。 ・現在、幼穂長2mm程で幼穂形成期である。
	前年値	61.1	612	10.8	39.4	
	平年値	59.8	635	11.5	38.7	
	平年比(差)	102	100	-0.6	1.1	

※ 平年値は、H27～R6年度の平均値、耕種概要は稲作情報NO1参照

3. 今後の管理（極早生コシヒカリ）

(1) 水管理

- 「コシヒカリ」は幼穂形成期（幼穂長2mm程、出穂前23日頃）をむかえている。幼穂形成期から出穂期にかけては要水量が増加する時期であるが、湛水を長く行うと根を傷める場合もあるので、**間断灌水を行う**。
中干しが強い場合は、根を守るため、いきなり湛水せず、湛水したらすぐに落水し、徐々に湛水期間を長くしながら間断灌水を行う。

(2) 肥培管理

- 情報田の生育状況から判断すると、幼穂形成始期の出穂前25日頃と推定される。一般田では幼穂形成期の出穂前22日頃のものもみられる。
必ず穂肥診断を行い、幼穂長と葉色の状況を確認し表1および表2、【穂肥診断の方法】を参考に穂肥を実施する。

○穂肥施用の目安は、幼穂長 15 ㎖の時（出穂前 1 8 日頃）に葉色 80cm 以下、SPAD 値が 36.0～39.5 程度（群落葉色が 3.3～3.7）の場合ゴールド有機 50 を 10kg/10a 施用する。

ただし、いもちの病斑が上位 3 葉以内にある圃場では、穂肥で窒素濃度が高まり降雨が続くと、「いもち病」の好適発生条件となるため、穂肥施用量は減ずる。

【表 1】 コシヒカリの出穂前日数と幼穂長の関係

出穂前日数	2 6	2 3	2 0	1 8	1 5	1 2
幼穂形成始期からの日数	0 日	0～3 日	3～6 日	6～8 日	8～11 日	11～14 日
幼穂長 (mm)	1mm	1～3mm	8～12mm	15～20mm	25～30mm	30mm 以上
草丈 (cm)	～72cm	～75cm	～78cm	～80cm	～83cm	～
穂肥の施用時期				↔		

【表 2】 穂肥診断基準

	葉色	葉色板		SPAD (値)	幼穂長 (mm)	草丈 (cm)	施用量 <ゴールド有機 50>
		群落	単葉				
穂肥施用時	淡い	3.0 以下	3.5 以下	34.0 以下	2	75 まで	1 5Kg/10a
		3.0～3.3	3.5～3.8	34.0～36.0	5	78 まで	
	標準	3.3～3.7	3.8～4.2	36.0～39.5	1 5	80 まで	1 0Kg/10a
	濃い	3.7 以上	4.2 以上	39.5 以上	—	80 以上	施用しない！

例) 穂肥施用時期の葉色 (SPAD) が 36.0～39.5、草丈が 80cm 以下であれば、ゴールド有機 50 を 10kg/10a 施用する。

【穂肥診断の方法】

- ① 幼穂形成始期頃の草丈を測る。
- ② 葉色（群落・SPAD 値）を測る。
- ③ 幼穂長を測る
- ④ 上記①②③の測定値を「穂肥診断基準」に当てはめ、施用量を確認する。
- ⑤ 施用量が確認できたら、記載された施用時期に穂肥を施用できるよう準備する。

※穂肥施用できるのは、葉色が「笹の葉色以下（3.7以下）」になってからである。

(3) 病虫害防除

①葉いもち病

- ・補植用の『置き苗』は、葉いもち病の発生源になるため、すぐに除去する。

②斑点米カメムシ

- ・斑点米カメムシによる被害を軽減するために畦畔雑草の除草を
水稻の出穂15日前（6月中旬）までに終わらせる。
特に斑点米カメムシは、イネ科雑草を好むことから
圃場内に発生しているヒエ等の雑草も併せて行う。

③紋枯病

- ・高温多湿条件で発生しやすいので、発生に注意する。



エノコログサやヒエが多発している
畦畔はカメムシの住処になっている



クモヘリカメムシ



ホソハリカメムシ

令和7年産 作物作付期間気象図
アメダス観測値(白石)

